

「おそと」を楽しむ暮らし

「街の使いこなすから考える省エネ生活」

忽那 裕樹 (くつな ひろき)

ランドスケープデザイナー。(株)E-DESIGN代表。NPO法人パブリックスタイル研究所理事長。千里リハビリテーション病院(GOOD DESIGN賞)では、過ごすことがリハビリにつながるランドスケープをデザインし、評価を受けた。都市をキャンパスに見立て、アート作品を展示する大阪キャンパス推進事業の審査員や水都大阪フェス2012チーフディレクターを務め、屋外空間の使いこなしの提案も幅広く行っている。

最近、耳にしない日がないと言ってもいい「節電」。この夏の課題のひとつである。電力不足の正確な数値の把握にはじまり、スマートメーターなどによる「見える化」、電力消費ピーク時の料金値上げ等々、節電方法についても、色々な情報メディアをにぎわしている。どこまで神経質に対応しないといけないのか、我慢を伴う節電が、生命の危機にまで及ぶ事態に、警鐘と対策を求める声も上がっている。大丈夫だという樂觀論もあるが、3・11以降、いまだ非常事態であるとの認識で、この難局を乗り越えないと次へ進めないのも確かであろう。しかしながら、この夏の「節電」は、とりあえずの対処方法の側面

が強く、これからのエネルギーシフトについての議論や、そもそものライフスタイルを考え直すところという、長い目で見た視点に欠けているところもある。そこで、ここでは生活の身近な環境、とくに、屋外環境との関わり方に注目して、省エネにもつながるライフスタイルの姿、そして、その環境づくりについて探ってみよう。

「おそと」へ出かけよう

夏場の電力消費のピークを抑えるのが、当面

の課題である。そこで、まず、その時間に屋外環境、すなわち「おそと」へ出かけることを提案したい。単純だが効果は高い。関西電力管内においては、ピーク時のエアコンだけで約400万kWを消費し、全体の13%を占めているという。家の中にいれば、エアコンだけでなくテレビや他の家電も稼働して、相当な電力消費となる。なので、しばらく避暑地に出かけるのもいいアイデアだ。標高が1000m上がると、条件にもよるが、5〜6度気温が下がると言われているのでエアコンいらず。より涼しいところへ出かけることによる節電を、資金と時間のある方々にはお勧めしたい。

より身近な環境において、ピーク時を把握して外出をすることも考えたい。広い部屋の中、一人で冷房は効率が悪い。まず、お出かけすることが大切。行先は大型集客施設でもいいし、近くの公園に行くのもいいだろう。しかし、ショッピングセンターや遊戯施設などはいいが、どうも、公園や広場に出かける理由が見つからない、という人が多い。私が編集長をしているウエブマガジン「OSOTO」(<http://www.osoto.jp>)では、屋外環境を使いこなす達人を多々紹介しているが、一般にはまだまだ公園や広場を使いこなすメニューや方法が知られていないと感じている。エアコンを切るために外出するのではなく、日ごろから「おそと」を使いこなして楽しみを共有する。そんな豊かなライフスタイルが省エネにつながれば、おそとと持続可能な省エネになるだろう。

「おそと」を使いこなす生活

「おそと」を使いこなす達人が多い街とさえいば、やっぱり、パリが思い浮かぶ。その過ごし方から、街を使いこなすことが暮らしの一部となっていることがうかがい知れる。「OSOTO」の記事から、その風景を紹介してみたい。公園でギターを

奏でる初老の男性の写真が印象的な「海外おそと事情」フランス・パリの記事からである。チュイルリー宮殿跡地の公園では、どこでも移動して好きな場所で座って過ごせる「どこでもイス」がある。涼しい池のほとりや木陰に置いて、思い思いの時間を過ごす。また、自動車メーカーの工場跡地に生み出されたアンドレ・シトロエン公園では、結婚式が行われ、その横で子どもたちが走り回っている。様々な使い方が同居する風景が微笑ましい。気球に乗ったり、噴水ではしゃぐ子ども、園芸用品や野菜を配るNPOの人たちもいる。ちょっとした広さの公園でも、多世代が話をする場所、佇む場所となっている。社交の場としても使いこなされている。街中の広場や道路がカフェやレストランになっていたりと、ほんと、いたるところで、屋外で過ごすことが日常となっている風景に出会えるのである。ここには我慢のイメージはなく、人生を楽しむ、住んでいる街に対して愛着と誇りをもっていることさえ感じられる。「節電」という対処方法ではな



チュイルリー公園
椅子を自由に移動できるというだけで、このような風景が描きだされる



アンドレ・シトロエン公園
通常の公園の過ごし方と結婚式の様子に、公園の使いこなしの多様さを見ることができる

人それぞれの楽しみ方を 受け止める環境

日本においても、確かに公園や広場を使いこなす魅力的な人が増えている。カフェなど屋外環境の魅力を生かした場所も多くはなっているが、「おそと」にいる居方^{いゑかた}が、もつと多様になってほしいと思う。様々な活動を支える場所であるはずの公園は、防災面や衛生面も重視して、国によって、かなり画一的なモデルでつくられてきた。戦後の混乱を避けるためもあって、都市公園法が管理面を重視し、禁止事項が多く設定されていることも多用途の利用を妨げている側面があることは間違いない。今後は、公園のキャラクタ



水都大阪フェス2011
ピクニックをはじめ、屋外ヨガや能、防災イベント等、
様々な活動が中之島公園を中心に結集した

ターをはっきりさせた場所づくりも、まちづくりと連動して必要となってくる。公園だけでなく、駅前広場や道路、河川空間にいたるまで、市民による利用ニーズをとら

えて、運営するしくみを充実させることが大切なのである。より多くの人々に、使いこなしてもらうきっかけが必要であり、継続的に関われるしくみも欲しい。

次に、それらを実現する試みである「水都大阪フェス2011」を紹介しよう。

水都大阪フェス2011は、「やってみたいをかなえよう!」をテーマに、まちを楽しくする様々なチャレンジを結集したお祭りとして、2011年10月に行われた。たくさんさんの夢の提案を受け付け、人の夢をかなえるために一生懸命になり、自分の夢もみんなと一緒にかなえる。このような気持ちと行動の交換ができるしくみを模索する機会をつくったのである。

まあ、いろんな提案があるもので、東北で被災されて結婚式ができなかったカップルを、よってたかつて祝福する公園結婚式。そこには、美容師も式場関係者もボランティアも、アーティストも自分ができることを寄せ集め、祝って喜び合う姿があった。管理サイドとの協議には苦労したが、実現することができた。防災をテーマにした子どもたちと楽しむイベントや、東北へのメッセージを込めた灯明、水上を行きかう大小様々な船、屋外でのヨガ教室や能舞台、そして、大ピクニック大会。日ごろのまちづくりや趣味の活動が一堂に会したプログラムが、中之島公園でところ狭し



ウェディングプロジェクト
被災者をみんなで祝福したパークウェディングは、たくさん
人の力で夢をかなえることができたプロジェクトのひとつ

応援するしくみをつくる実験が展開された。このお祭りがきっかけとなり、日常生活に屋外環境

と共にある暮らしの風景が紡ぎだされ、楽しいライフスタイルが共有される。こういう、積み重ねが重要なのである(水都の取り組みはHPをご覧ください。http://www.osaka-info.jp/suito/)。

大きな環境にも思いをはせる

振り返ってみれば、日本には、屋外環境と共にある暮らしの風景があった。涼を取る工夫として風鈴の音からはじまり、樹木などで冷却された風を室内に取り込む仕掛け、また、体を冷やしてくれるスイカなどの食物まで、昔から培われてきた生活の知恵が風景としても思い浮かべられ、それを支えるコミュニティや人の姿が素敵に見える暮らしがあったのである。

これら屋外環境と共にある暮らしが変わったのはいつ頃なのかと言えば、気密性や断熱性を高めた建築が広く流布した時代である。そのきっかけが「節電」をうたって社会全体が今と同じように動いた1973年のオイルショックであり、それが大きな原因のひとつだというのは、少し皮

肉な感じもする。

以降、屋外環境との物理的な遮断が起こり、屋外で涼を取るよりも、室内の一定した環境づくりと、それをベースにした生活が主流になったのである。気密性を高めて熱を逃がさないということは、冬季には一定の効果を示すが、夏季の冷房においては、非常に負荷がかかる。空調だけに限らず、自動車の普及、無理な都市化は、都市環境を暑くする要因を増やし、いわゆるヒートアイランドの要因と地球温暖化の影響のもと、ここ100年間で平均気温は、全国平均で1度、驚くなかれ、大阪は2.1度もの上昇を記録している。室内を一定の秩序で担保する考え方は、エネルギーへの依存を高めるばかりだ。緑地や水辺を連続させて特徴ある場所を提供すると同時に、都市環境を冷やす工夫に同時に取り組む必要がある。

より多様な活動へ分散していく

我慢する節電、省エネは長続きしない。今年できたとしても、来年は効果も半減である。一斉に同じことに取り組むのは、一時的には効果が

と繰り広げられたのである。

公園だけでなく、船に乗って大阪の街をめぐり、逸品とドリンクを提供している飲食店をはじめとする水辺バルからコミュニティサイクルまで。様々な街を使いこなして夢をかなえる、そして、夢を

あるが、飽きたり、しんどかったり、上手くないかない。であれば、どうするのか? いろんな選択肢を用意して、社会全体で多様な活動のバランスを上手くマネジメントすることが求められる。安全を確保するため、画一的で一方的な選択性の低い場所づくりは、公園に限らず、今回の原発の問題がそのあり方に疑問を投げかけたのは言うまでもない。選択肢をたくさん用意して、楽しみを分散することで、電力消費のピークさえも抑える。そんなライフスタイルの多様さを担保する考え方が鍵となる。選択する内容が多くて選ぶのが大変なぐらい提供し、同じことをするにしても、時間をずらしてピークをつくらない、といったことがとても大切な視点になるのである。

同じような行動をする集団は、想定外の条件に当然弱い。日常から多様さを受け止める社会を構築していくことが、震災以降重要視されている、回復力の高い持続性のある社会を可能にすると考ええる。

それには、何よりも住み働いている街を楽しく使いこなす、他者の楽しみを認め、共有し合えることから始めることが大切である。そんな豊かなライフスタイルを、次世代につなげたいと思う。さあ、「おそと」へ出かけましょう。